

日本のなかのヨーロッパ資料 02

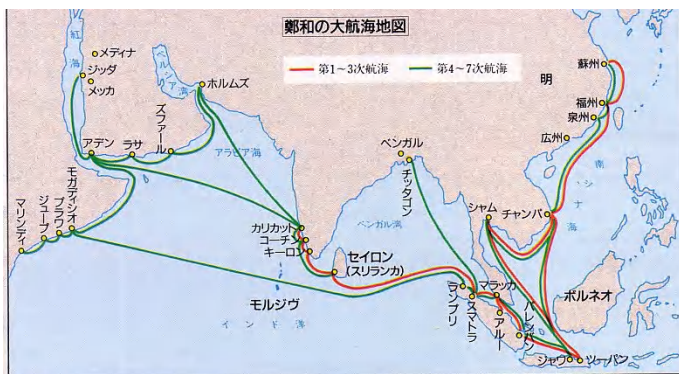
アジアの大航海時代(出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』)



1. 鄭和

鄭和(てい わ、Zhèng Hé, 1371年 - 1434年)は、中国明代の武将。永楽帝に宦官として仕えるも軍功をあげて重用され、南海への七度の大航海の指揮を委ねられた。本姓は馬、初名は三保で、宦官の最高位である太監だったことから、中国では三保太監あるいは三宝太監の通称で知られる。

鄭和の船団は東南アジア、インドからアラビア半島、アフリカにまで航海し、最も遠い地点ではアフリカ東海岸のマリンディ(現ケニアのマリンディ)まで到達した。



彼の指揮した船団の中で、最大の船は宝船(ほうせん)と呼ばれその全長は120メートルを超えるような大型船だったとされる。

1-1. 略歴

馬三保、すなわち後の鄭和は、馬哈只の子として雲南でムスリム(イスラム教徒)として生まれた。姓の馬は

預言者ムハンマドの子孫であることを示し、父の名はイスラム教の聖地メッカへの巡礼者に与えられる尊称ハッジに由来する。先祖はチンギス・ハーン



ス・ハーン of 中央アジア遠征のときモンゴルに帰順し、元の世祖クビライのとき雲南の開発に尽力した色目人政治家サイド・アジャル(賽典赤)である。彼がイスラム教徒の出身だったことは、のちに永楽帝をして鄭和を航海の長として使おうと考えた理由の一つだと考えられる。

朱元璋が明を建てると、元の影響下にあったこの地は討伐を受け、まだ少年だった鄭和は捕らえられて去勢され、宦官として当時燕王だった朱棣(のちの永楽帝)に献上された。朱元璋の死後、永楽帝が帝位を奪取する靖難の変において馬三保は功績を挙げ、永楽帝より鄭の姓を下賜され、宦官の最高職である太監とされた。

1-2. 大航海

鄭和の巨艦とコロンブスの帆船の模型 1405年7月11日、永楽帝の命により第1次航海へと出る。『明史』によれば長さ44丈（約137m）、幅18丈（約56m）という巨艦であり、船団は62隻、総乗組員は2万7800名余りに登る。

蘇州から出発した船団はチャンパ→スマトラ→パレンバン→マラッカ→セイロンという航路をたどり、1407年初めにカリカットへと到達した。

マラッカ海峡では海賊を行っていた陳祖義という華人を捕らえて一旦本国へ帰国している。この航海によりそれまで明と交流が無かった東南アジアの諸国が続々と明へと朝貢へやってくるようになった。

1407年9月に帰国後、すぐに再出発の命令が出され年末には第2次航海へと出発した。航路はほぼ同じだが、今度はタイ・ジャワなどを經由してカリカットへ至った。帰路の途中でセイロン島に漢文・タミル語・ペルシア語の3ヶ国語で書かれた石碑を建てている。

1409年の夏に帰って来た鄭和は再び再出発を命じられて年末に出発した。今度もほぼ同じ航路でカリカットに到達したが、帰路のセイロンで現地の王が鄭和の船に積んである宝を強奪しようと攻撃してきたので鄭和は反撃して王とその家族を虜にして本国へと連れ帰り、1411年7月に帰国した。

1-3. アラビア海へ

これまでの3回はいずれもほぼ同じ航路を取り、しかも立て続けの航海だったが、4回目は少し間を置いて1413年の冬に出発した。これまでとは違い更に西へと行くので、準備が必要だったと推測される。

カリカットへ至るまではこれまでとほぼ同じ航路を取り、そこから更に西へ航海してペルシャ湾のホルムズやアラビア半島南のアデンなどに到達した。帰路の途中、スマトラで現地の王の要請で兵を使って反逆者を討ち、1415年7月に帰国した。

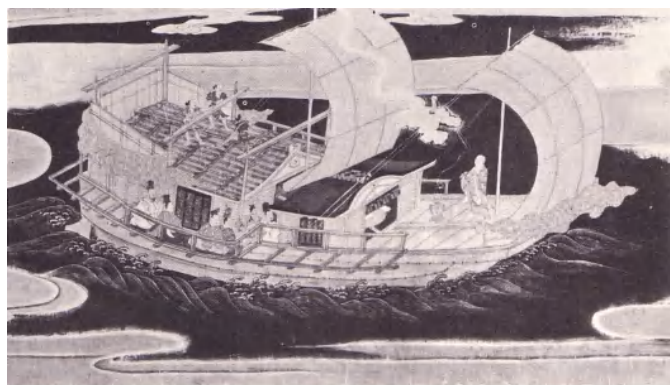


2. 日明貿易

2-1. 概要

日明貿易は、日本の室町時代に日本が中国の明朝に行った貿易を指す。貿易の際に、許可証である勘合（勘合符）を使用することから勘合貿易（かんごうぼうえき）とも呼ばれる。李氏朝鮮との日朝貿易や南海貿易と並ぶ。

歴史 1368年に朱元璋（洪武帝）が建国した明朝は、東アジアで活動していた倭寇（前期倭寇）の禁圧を日本に対して要求し、さらに朝貢を勧めるために使節を派遣する。日本では足利氏が奉じる



遼明船 これは16世紀の前期にえがかれたもので、内容は平安朝時代の話であるが、勘合船の時代の海洋を航した船のすがたをうつしたものとしよう。

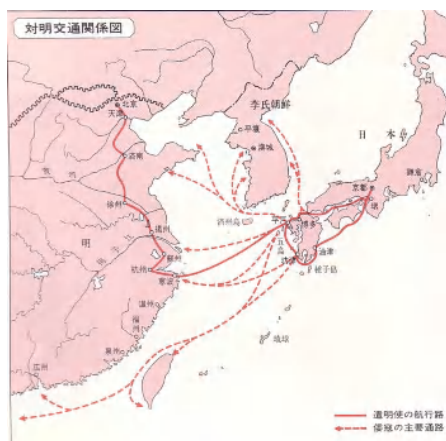
京都の北朝と吉野朝廷（南朝）が対立する南北朝時代で、北九州で活動していた南朝方の懐良親王は明に朝貢し、「日本国王」に冊封されていた。

室町幕府 3 代将軍の足利義満は、九州へ今川貞世（了俊）を派遣して南朝勢力を駆逐し対明交渉を開始するが、1380 年には明で胡惟庸の獄が起り胡惟庸との通牒を疑われたこともあり、日明関係は成立しなかった。義満は 1392 年（元中 9 年/明德 3 年）に南北朝合一を行い、1399 年（応永 6 年）には独自に私貿易を行っていた大内義弘を応永の乱で討つ。

1401 年（応永 8 年）に博多商人肥富の献策で、僧祖阿と肥富を使節として明へ派遣する。翌年に義満を「日本国王臣源」に封じる内容の国書を持ち帰国するが、明使の在日中に靖難の変で永楽帝が即位すると、再び国書を送り日本と明の間に国交が成立する。

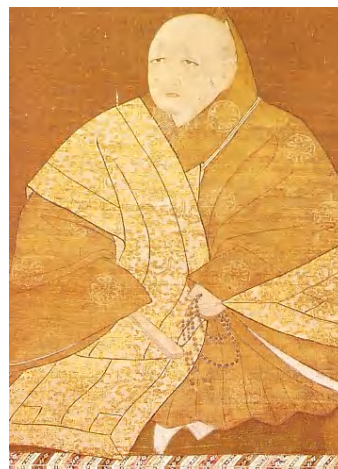
義満死後の 4 代将軍足利義持や前管領の斯波義将らは朝貢形式に不満を持ち、1411 年（応永 18 年）貿易を一時停止するが、6 代将軍足利義教時代の 1432 年（永享 4 年）に復活する。応仁の乱以降には堺を本拠とする管領家の細川氏や、乱で兵庫を得た大内氏、博多や堺などの有力商人が経営するようになった。

1523 年（大永 3 年）の寧波の乱の結果、大内氏が権益を握り、1536 年（天文 5 年）に大内義隆は遣明船派遣を再開する。1551 年（天文 20 年）に義隆が家臣の陶晴賢による謀反（大寧寺の変）によって滅亡すると、後を継いだ大内義長（大友義鎮の弟）は、1556 年（弘治 2 年）と翌年に兄・大友義鎮とともに貿易再開を求める使者を派遣する（『明実録』）が、明側は義長を篡奪者と看做してこれを拒絶、また 1557 年（弘治 3 年）に義長が毛利元就に討たれて大内氏が名実ともに滅んだ事によって、貿易再開の見込みが絶たれ、東アジアでは倭寇（後期倭寇）による密貿易が中心となった。



2-2. 形式

室町幕府将軍が明皇帝から「日本国王」として冊封を受け、明皇帝に対して朝貢する形式で行われた。制限貿易で、1401 年（応永 8 年）から 1549 年（天文 18 年）まで 19 回に渡り行われる。1404 年（応永 11 年）以降は倭寇と区別し正式な遣明使船である事が確認できるよう勘合を所持した勘合船に限られるようになり、1432 年（永享 4 年）に宣徳条約で回数などが規定される。勘合には「日字勘合」と「本字勘合」の 2 種類が存在した。日本→明は「本字勘合」、明→日本は「日字勘合」が使用された。遣明船は朝貢のための船であるから日本国王（足利将軍）からの進貢物に対して、明国皇帝が頒賜物を授ける形式での公式の貿易が行われた他、博多や堺などの有力商人も同乗し、明政府によって必要な商品が北京にて買い上げられる公貿易や明政府の許可を得た商人・牙行との間で私貿易が行われていた。遣明船に同乗を許された商人は帰国後に持ち帰った輸入品の日本国内の相場相当額の 1 割にあたる金額を抽分銭と



して納付した。

日明貿易がもたらした利益は具体的には不明であるが、宝徳年間に明に渡った商人楠葉西忍によれば、明で購入した糸 250 文が日本で 5 貫文 (=5000 文) で売れ、反対に日本にて銅 10 貫文を 1 駄にして持ち込んだものが明にて 40-50 貫文で売れたと記している。また、応仁の乱以後遣明船を自力で派遣することが困難となった室町幕府は有力商人にあらかじめ抽分銭を納めさせて遣明船を請け負わせる方式を取るようになるが、その際の抽分銭が 3000-4000 貫文であった。そのため、その 10 倍に相当する商品が日本に輸入され、抽分銭や必要経費を差し引いても十分な利益が出る構造になっていたと考えられている。

勘合貿易が行われるようになると倭寇は沈静化する。輸入された織物や書画などは北山文化や東山文化など室町時代の文化にも影響した。

2-3. 商品

輸出品・硫黄、銅などの鉱物、扇子、刀剣、漆器や屏風ほか

輸入品・明銭（永楽通宝）、生糸、織物、書物ほか

この貿易において、日本の銅は国内よりも非常に高値で明に輸出された。この理由としては、中国の歴史上慢性的とも言えた銅の不足の他に、日本の銅には銀が少なからず含有しており、当時の日本にこれを抽出する技術は無かったが、明はそれを持っていたためである。結果、「銅にしては高いが銀にしては安い」価値で交易されていた。

3. 倭寇

倭寇（わこう）とは、一般的には 13 世紀から 16 世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸の沿岸部や一部内陸、及び東アジア諸地域において活動した海賊、私貿易、密貿易を行う貿易商人の事である。和寇と表記される場合もある。また海乱鬼（かいらぎ）とも呼ばれる。

3-1. 概要

字句をそのまま解釈すれば、倭寇とは「倭（日本）による侵略」という意味で、中国、朝鮮では日本人海賊を意味する。用事例を辿ると 5 世紀の高句麗広開土王碑の条文にも見られるが、後世の意味とは異なる。ここに見られる『倭、○○（地名）を寇す』という表現の漢文表記では『倭寇○○』のように「倭寇」の 2 字が連結しており、これが後に名詞として独立したと考えられている。倭寇の構成員は、前期倭寇では主に日本人と高麗人であったと推測されている。後期倭寇は大半が中国人であったという。



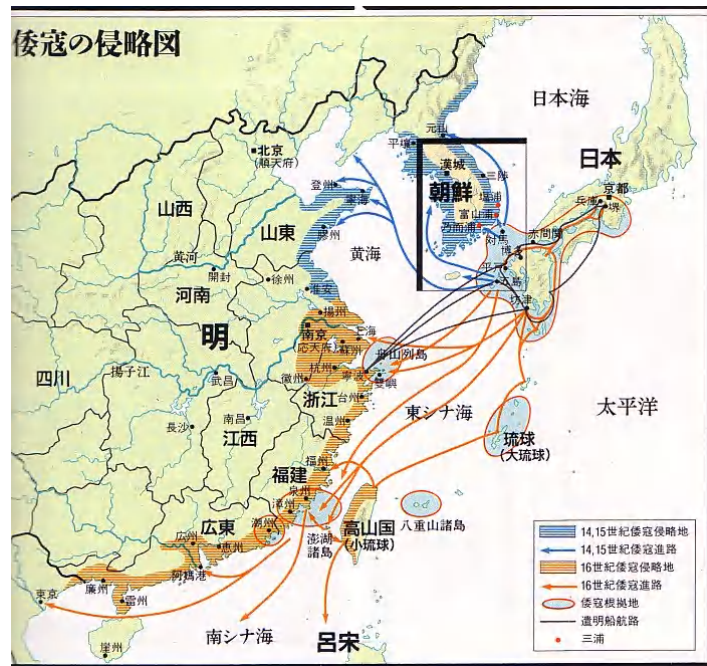
また、16 世紀の豊臣秀吉の朝鮮出兵

（文禄・慶長の役,中国:萬曆の役,韓国:壬辰倭亂）、日中戦争における日本軍も「倭寇」と呼ばれるなど、排日感情の表現として使用された事がある。現代でも、韓国人や中国人が日本人を侮蔑するとき用いており、「野蛮人」のニュアンスを含む。

3-2. 倭寇の構成

倭寇の構成は、初期～最盛期の前期倭は、「高麗史」に見える高麗末 500 回前後の倭寇関連記事の内、高麗人が加わっていたと明記されているのは 3 件である。このことからその構成員の多くが日本人であったと推測される。一方、前期倭寇の最末期についての文献である、朝鮮王朝実録の『世宗実録』二十八（1446 年）十月壬戌条には、「然其間倭人不過一二而本國民仮著倭服成黨作亂」とあり、真倭は一割、二割にすぎず、残りは我が国の賤民であると記述されている。この記載から、前期倭寇の最末期には日本人の倭寇に占める割合が多数を占めなくなったということが伺える。倭寇の構成について、田中健夫は、1982 年の著書において、1370 年から 90 年初めに倭寇の襲撃がもっとも激しくなったのは新たに高麗の賤民階級が加わったからだとし、高麗を襲った倭寇の構成員を日本人を主力として若干の高麗の賤民を含むものだと述べたが、1987 年の著書においては、倭寇の構成を日本人と朝鮮人の連合か朝鮮人のみであったと述べた。また、田中は 1997 年の著書において、高麗/李朝にとって倭寇は外患であると同時に内憂でもあり、李氏朝鮮が高麗から引き続いて倭寇が外患であることを強調することで倭寇が抱える内憂の性格を隠蔽し、それを梃子として国家体制を確立したとも述べている。

田中の説について村井章介は、多くの人員や馬を海上輸送させる困難さの説明も含めて説得力があるとしたが、田中が主張の根拠とした朝鮮王朝実録に記されている世宗王代の判中樞院事・李順蒙の発言について、膨大な朝鮮の史料のなかで倭寇に占める倭人の比率が記載されているのは田中が挙げた一例しか存在せず、その上、その史料は倭寇の最盛期から 50 年以上後のものであることを述べ、また、その史料における指摘は賦役から逃亡する辺境の民が多い、という事態の模範として提出されており、賤民階級に対する蔑視が、基本的な考え方となっているため、倭人



が一割～二割に過ぎないという数字を内容を十分に考えないでそのまま受け入れることは出来ないと述べている。倭寇の正体について、村井は、当時国家概念が明確ではなく、日本の九州、朝鮮半島沿岸、中国沿岸といった環東シナ海の人々が国家の枠組みを超えた一つの共同体を有しており、村井は彼らを「倭人」という「倭語」「倭服」といった独自の文化をもつ「日本」とはまた別の人間集団だとし、境界に生きる人々（マージナル・マン）と呼んでいる。村井によれば、倭寇の本質は国籍や民族を超えた人間集団であり、日本人、朝鮮人とといった分別は意味がないと述べている。

高橋公明は倭寇の構成について、日本人だけではなく濟州島の海民も倭寇に加わっていた可能性を唱え、倭寇の活動が「国境をまたぐ地域」で繰り広げられた国家の枠組みを

越えた性格のものだと述べている。

東郷隆は前期倭寇の首領のひとり、阿只抜都について赤星氏や相知比氏（松浦党）といった九州の武士、あるいはモンゴル系島嶼人や高麗人といった様々な推測をしている。

3-3. 前期倭寇と後期倭寇

倭寇の歴史は大きく見た時に前期倭寇と、過渡期を経た後期倭寇の二つに分けられる。

3-3-1. 前期倭寇

前期倭寇が活動していたのは14世紀、日本の時代区分では南北朝時代から室町時代初期、朝鮮では高麗から朝鮮王朝の初期にあたる。日本では北朝を奉じて室町幕府を開いた足利氏と、吉野へ逃れた南朝が全国規模で争っており、中央の統制がゆるく倭寇も活動し易かった。前期倭寇は日本人が中心で、元寇に際して元軍とその支配下にあった高麗軍によって住民を虐殺された対馬・壱岐・松浦・五島列島などの住民が中心であり、「三島倭寇」と総称された。

朝鮮半島や中国沿岸に対する海賊行為は、元寇に対する地方の私軍による復讐の意味合い、および、再度の侵攻への予防という側面もあったと考えられる。また、これらの地域では元寇による被害で労働力不足に陥り農業生産力が低下したために、これを補完する（奪還する）目的があったとも考えられている。その証拠として前期倭寇の初期においては、朝鮮半島で唯一稲作が盛んに行われていた南部の沿岸地方を中心に襲撃し、食料や人間を強奪していることが挙げられる。さらには、連れ去られた家族を取り戻すためであった事例もあり、実際に家族と再会した記録も残っている。

1370年代の前期倭寇の行動範囲は朝鮮北部沿岸にも及び南部では内陸深くまで侵入するようになった。

倭寇の被害を中心的に受けていた高麗では1376年には崔瑩が鴻山で、1380年には、李成桂が荒山、崔茂宣、羅世が鎮浦で、1383年には鄭地らが南海島観音浦で、倭寇軍に大打撃を与え、1389年の朴葳による対馬国侵攻では、倭寇船300余隻を撃破し、捕虜を救出し、その後、町を焼き討ちして帰還した。これ以降倭寇の侵入は激減する。倭寇討伐で名声を得た李成桂は、高麗王朝を倒して李氏朝鮮を建国した。倭寇の勢力は著しく衰退したものの、朝鮮への侵入が完全になくなることはなかった。しかし1419年に朝鮮王朝が軍を対馬に送って倭寇を撃破（応永の外寇）したことと、同年に遼東半島で明軍に敗れたことが致命傷となった。

応永の外寇以前の形態は単なる局地的な奪還・復讐戦であり、これを倭寇と分類せず、それ以降を倭寇と考える説もある。清の徐繼畲の『瀛環志略』や李氏朝鮮の安鼎福の『東史綱目』には、倭寇の原因は日本に対する侵略行為を行った高麗人（朝鮮人）への報復である、と記述されている。

中国では1368年に朱元璋が明王朝を建国し、日本に対して倭寇討伐の要請をするために使者を派遣する。使者が派遣された九州では南朝の後醍醐天皇の皇子で征西将軍宮懐良親王が活動しており、使者を迎えた懐良は九州制圧のための権威として明王朝から冊封を受け、「日本国王」と称した。その後幕府から派遣された今川貞世により九州の南朝勢力が駆逐され、南朝勢力は衰微し室町幕府将軍の足利義満が南北朝合一を行うと、義満は倭寇討伐を行い、新たに「日本国王」として冊封され、勘合貿易が行われる。前期倭寇は、室町

幕府や北九州の守護大名の日明貿易の独占や対馬と朝鮮の間の交易再開、李成桂による征討などによって下火になっていく。

3-3-2. 後期倭寇

日本では1523年に勘合を巡って細川氏と大内氏がそれぞれ派遣した朝貢使節が浙江省寧波で争う寧波の乱（寧波争貢事件）が起り、勘合貿易が途絶すると倭寇を通じた密貿易が盛んになり、さらに中央で起った応仁の乱により混乱状態が戻ると、再び倭寇の活動が活発化する。

後期倭寇の中心は私貿易を行う中国人であったとされ、『明史』日本伝にも真倭（本当の日本人）は10のうち3であるとも記述されている。ただし少ないながらもこれら日本人は、当時日本が戦国時代であったことから実戦経験豊富なものが多く、戦争の先頭に立ったり指揮を執ることで倭寇の武力向上に資していた。この時期も引き続いて明王朝は海禁政策により私貿易を制限しており、これに反対する中国や朝鮮の商人たちは日本人の格好を真似て（偽倭）、浙江省の双嶼や福建省南部の月港を拠点とした。

これら後期倭寇は沿岸部の有力郷紳と結託し、後期にはポルトガルやイスパニア（スペイン）などのヨーロッパ人や、日本の博多商人も関わっていた。後期倭寇の頭目には、中国人の王直や徐海、李光頭、許棟などがおり、王直は日本の五島列島などを拠点に種子島への鉄砲伝来にも関係している。1547年には明の將軍である朱紘が派遣されるが鎮圧に失敗し、53年からは嘉靖大倭寇と呼ばれる倭寇の大規模な活動がはじまる。こうした状況から明朝内部の官僚の中からも海禁の緩和による事態の打開を主張する論が強まる。その一人、胡宗憲が王直を懐柔するものの、中央の命により処刑した。指導者を失ったことから倭寇の勢力は弱まり、続いて戚継光が倭寇討伐に成功した。しかし以後明王朝はこの海禁を緩和する宥和策に転じ、東南アジアの諸国やポルトガル等の貿易を認めるようになる。ただし、日本に対してのみ倭寇への不信感から貿易を認めない態度を継続した。倭寇は1588年に豊臣秀吉が倭寇取締令を発令するまで抬頭し続けた。これが豊臣秀吉による文禄・慶長の役の一つの伏線となる。



▶六角井戸 倭寇の頭目王直らは、福江領主宇佐盛定に歓待され、本拠を五島におき、自ら徽王と号して三十六島の倭人を指揮し、その勢力を東シナ海に振るった。今の五島福江に残る中国式の六角井戸と、王直の屋敷の敷地内であって海上での無事を祈った明人堂は、その名残といえる。因みに同類の六角井戸は平戸にも残存している。

3-4. 倭寇以後の東アジア海上世界

豊臣秀吉の海賊停止令により、倭寇の活動は一応は収束をみるが、東アジアの海上世界では林道乾や林鳳（リマホン）、明を奉じて清に抵抗した鄭芝竜、鄭成功の鄭一族などが半商半海賊的な存在で、倭寇ではないが同時代の海上勢力である。

3-5. 倭寇の影響

中国の明や韓国の高麗・朝鮮王朝、また日本の室町幕府に対し、倭寇は結果として重要な政治的外交的な影響力を与えた。明は足利幕府に対し倭寇討伐を要請する見返りとして勘合貿易に便宜を与えざるを得ず、また高麗王朝は倭寇討伐で名声を得た李成桂によって滅ぼされ、李成桂によって建国された朝鮮王朝は文禄の役の頃まで倭寇対策（懐柔と鎮圧）に追われた。朝鮮王朝による対馬侵攻（応永の外寇）も、倭寇根拠地の征伐が大義名分と

されていた。

3-6. 活動地域

倭寇の活動地域倭寇の根拠地は日本の対馬や壱岐・五島列島をはじめ、朝鮮の済州島、中国の沿海諸島部、また台湾島や海南島にも存在していた。フィリピン童話において、倭寇と思しきものが活躍するものもあり、この周辺までひろがっていたかもしれない。また、倭寇であるかは不明であるが、現在のミャンマーにおいてもスペイン軍が「ローニン」の部隊に襲われて全滅したとの記録もある。

3-7. 八幡船

日本の室町時代から江戸時代にかけての海賊船は通称して「八幡（やわた）船」と呼ばれた。倭寇が「八幡（はちまん）大菩薩」の幟を好んで用いたのが語源とされるが、「ばはん」には海賊行為一般を指すとも考えられている。

3-8. 高麗・朝鮮人と倭寇

『高麗史』によれば1350(庚寅)年2月「倭寇の侵すは此より始まる」という有名な記事があり、これが当時の公式見解であったようだが、庚寅年以前にも多数の記事がある。こうした初期倭寇の特徴として高麗軍船の焼き討ちも目立つことはとくに注意される。高麗や朝鮮は宗主国である元や明に上奏し、元寇以降もさかんに軍艦を建造して対馬を拠点とする倭寇討伐を目的とし、1389年、1419年などに単独で侵攻している。これは日本侵略を口実に元や明の大軍が再び自国に長期駐留して横暴を極めることをおそれたあまりの「先走り」だとされる(『同』列伝・鄭地)。

また、同書(列伝・金先致)によれば、1375年の藤経光誘殺未遂によって島民が激昂し、倭寇が高麗住民の無差別殺戮に出るようになったと記している。

4. 朱印船

朱印船(しゅいんせん)は、16世紀末から17世紀初頭にかけて日本の支配者の朱印状(海外渡航許可証)を得て海外交易を行った船を言う。朱印状を携帯する日本船は当時日本と外交関係があったポルトガル、オランダ船や東南アジア諸国の支配者の保護を受けることができた。

4-1. 背景

南北朝時代や戦国時代には九州・瀬戸内海方面の武士や海賊が中国、朝鮮沿岸を荒らしまわり、倭寇と恐れられた。16世紀後半になるとポルトガル船が日本に来航するようになって海外へ



の関心が高まり、東南アジア方面にまで進出する日本人も現れた。天下統一を達成した豊臣秀吉は日本人の海外交易を統制し、倭寇を禁圧する必要から、1592年に初めて朱印状を

発行してマニラ、アユタヤ、パタニなどに派遣したとされるが、この時のことはあまり資料がない。

4-2. 朱印船制度の創設

朱印船(寛永年間)関ヶ原の戦いで全国統一した徳川家康は海外交易に熱心な人物で、1600年豊後の海岸に漂着したオランダ船の航海士ウィリアム・アダムスやヤン=ヨーステンらを外交顧問として採用したほどである。1601年以降、安南、スペイン領マニラ、カンボジア、シヤム、パタニなどの東南アジア諸国に使者を派遣して外交関係を樹立し、1604年に朱印船制度を実施した。これ以後、1635年まで350隻以上の日本船が朱印状を得て海外に渡航した。朱印船は必ず長崎から出航し、帰港するのも長崎であった。なお、明帝国は日本船の来航を禁止していたので、中国は(ポルトガル居留地マカオを除けば)朱印船渡航先とはならず、朝鮮との交易も対馬藩に一任されていたので、朱印状は発行されなかった。

4-3. 朱印船渡航先

安南 当時北ベトナムを領有していた黎氏を擁立するハノイの鄭氏政権である。東京(トンキン)ともいう。

交趾 当時実質的に中部ベトナムを領有していたフエの阮氏政権である。広南国ともいう。その交易港はホイアン(会安)及びダナンであった。

占城 ベトナムによって南ベトナムの一隅に押し込まれていたチャンパ王国である。

暹羅 タイのアユタヤ王朝である。アユタヤには大きな日本人町が形成され、山田長政が活躍する。アユタヤからも交易船が長崎に来た。

柬埔寨 メコン河流域のプノンペンを首府とするカンボジア王国である。

太泥 マレー半島中部東海岸のマレー系パタニ王国である。当時は女王が支配し、南シナ海交易の要港であった。

呂宋 スペインの植民地ルソン島である。首府マニラが新大陸とのガレオン貿易の要港で、中国船の来航も多かった。

高砂 当時ゼーランディア城を拠点にオランダ人が支配していた台湾である。台湾も中国商船との出会いの場であった。

いずれも赤道以北に限られていた。渡航先集計によると交趾(73回)で最も多く、暹羅(55回)、呂宋(54回)、安南(47回)と続く。

4-4. 朱印船貿易家

商人:最も数が多く、記録に残る限り65名、さらに婦人2名、琉球出身者1名を数える。代表的な人物は京都の豪商である角倉了以、茶屋四郎次郎、大坂の末吉孫左衛門、長崎の末次平蔵らである。

大名:九州の大名ら10名を数える。島津忠恒、松浦鎮信、有馬晴信、細川忠興、鍋島勝茂、加



藤清正、亀井茲矩、五島玄雅、竹中重利、松倉重政らである。

武士:長崎の村山等安や堺の今井宗薫、大坂と平戸の武士 4 名にも朱印状が与えられている。
明人:日本在留の明国商人 11 名にも朱印状が発行された。明は中国人の日本渡航を禁止しており、これら中国人は密貿易で渡来し、在住する者であった。著名な者としては福建の海賊・李旦がいる。

欧州人:ウィリアム・アダムス、ヤン・ヨーステンら日本在住のオランダ人、イングランド人、ポルトガル人 12 名にも発行された。

4-5. 朱印船乗組員

朱印船に乗り組むのは船長以下、按針航海士、客商、一般乗組員らであるが、とりわけ航海士には中国人、ポルトガル人、スペイン人、オランダ人、イギリス人が任命されることが多く、一般乗組員にも外国人が入った。もちろん日本人もいた。



4-6. 交易品目

東南アジア諸港へ赴く朱印船の多くは意外なことに中国産の生糸や絹の輸入が目的であった。日本でも絹は古代から産出したが、

中国産に比べると品質が悪く、太平の世の到来で高級衣料である中国絹に対する需要が増大したためである。他方、かつて倭寇に苦しんだ明は日本船の中国入港を禁止しており、朝鮮の役で敵対国となってからはなおさらであった。明は中国商船の日本渡航も禁止していたが、これは徹底せず、密かに来航する中国船もあったが、十分な量ではなかった。このため明国官憲の監視が及ばず、中国商船は合法的に来航できる東南アジア諸港で日本船との出会い貿易が行われたのである。中国製品以外にも武具に使用される鮫皮や鹿皮、砂糖など東南アジア産品の輸入も行われた。

見返りとして、日本からは銀、銅、銅銭、硫黄、刀などの工芸品が輸出された。当時中国では銀が不足していたため、朱印船の主要な交易相手である中国商人は銀を欲した。しかも当時、日本では石見銀山などで銀が盛産されており、決済手段として最も適していた。ベトナムなどには日本の銅銭も輸出された。

4-7. 朱印船貿易の終末

江戸幕府の鎖国政策の進展により、幕府公認の朱印船の海外渡航すら難しくなり、1633 年老中奉書船以外の海外渡航や帰国を禁止する第 1 次鎖国令が発令され、1635 年にはすべての日本人の海外渡航と帰国を禁止する第 3 次鎖国令が発令されて朱印船貿易は終末を迎えた。この措置によって東南アジアで朱印船と競合することが多かったオランダ東インド会社が莫大な利益を得、結局は欧州諸国としては唯一、出島貿易を独占することになる。